

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 池戸七夕飾りと古社寺をめぐる

講師 千葉幸伸

(三木町文化財保護審議会委員)

平成21年8月2日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 木田郡三木町

三木町は香川県の東部に位置し、高松市、さぬき市、徳島県美馬市に接しています。東西に主要地方道が通り、高松市のベッドタウンの一つであり、また香川大学の医学部、農学部を擁する学生の街でもあります。8月には池戸の『七夕』、9月下旬に行われる『獅子舞フェスタ』が有名です。昭和29年（1954年）10月1日町制施行。木田郡の1町4村（平井町 神山村 田中村 氷上村 下高岡村）が合併して三木町が誕生しました。昭和31年（1956年）9月30日に 木田郡井戸村を編入合併。昭和34年（1959年）11月1日に 旧井戸村の一部が大川郡長尾町（現在のさぬき市）に編入されています。

面積 75・78平方キロメートル

人口 2万8,462人（2009・6・1現在）

2 池戸七夕まつり

池戸の商店街は琴電池戸駅の東に位置し、全長175mのアーケードが設置されています。生鮮食品等の23店舗が商店街の中にあります。

池戸七夕祭りは昭和27年（1952年）に池戸の商店主たちが中心となって、商店街振興のため始められた祭りです。毎年8月の第1土曜日・日曜日の2日間行われ、それぞれ



町花 シャクヤク

れに趣向を凝らし、短冊を吊るした4〜5メートルの500本を越える笹竹が街を彩ります。また、露天市や西徳寺の大茶会などたくさんの行事が開かれ、夏の風物詩として定着しました。近隣からも多くの人が訪れています。

3 西徳寺

ふおんざんほうこういん
不遠山放光院（本尊 阿弥陀如来）

全讃史には、「天正中、僧了願之を建つ。」讃岐国名勝図会には「同所にあり、不遠山と号す一向宗、本尊阿弥陀如来。当寺は摂津国に在りしを、天正年中沙門了願ここに遷せり。」とあります。もとは摂津の国にあり、宝積坊ほうしやくぼうと称していましたが、天正中中に兵火にかかり、開基などの記録がすべて消失してしまいました。天正年間に乗賢または了願という僧によつてこの地に建立したという説がありますが、どちらも摂津国から讃岐へ移り建立された寺であることがわかります。

明治2年（1869年）の神仏分離の時、池戸八幡

宮えとくいんの別当恵徳院が廃寺になり、旧神体など4体（神功皇后・仲津姫尊なかつひめのみこと・僧形八幡・阿弥



西 徳 寺

陀如来)が寺に送られてきて安置されています。この4体は江戸時代のもですが、色彩も鮮やかで実に美しい姿をした像で、他にあまり例を見ない珍しい像です。

池戸七夕祭りの時には七夕大茶会の会場になります。本堂、書院の2席を設け、各流派が交代で担当しています。ただし、今年(平成21年)は工事のため、茶会はおこなわれません。また、寺の境内には樹齢約500年の「いちちょう」の大木があります。

明治32年(1899年)三木・山田両郡が合併し、新たに木田郡が誕生したとき、西徳寺を仮庁舎として木田郡役所開庁式が行われました。

【西徳寺の鬼の角】(周り30cm、長さ38cmくらいの角と、長さ34cmくらいの足の骨)

西徳寺には「法然上人の教化を受けたと伝えられる鬼の角」が残されています。

今から250年ほど前、元文2年(1737年)6月26日、とまばり苦張(さぬき市志度町小

田)の漁師長十郎の網に不気味な角と足らしき骨がかりました。「これはいったい何だろう」と騒いでいると、見知らぬ人が現れ「これはただの骨ではない。法然上人が讃岐の地に流されたとき、その教えを受け、自ら悔いあらためて仏門に帰依した鬼の頭から取れた角だ」と語って姿を消しました。長十郎はそれを聞き、「鬼でさえ仏の教えを聴聞したのに自分は人間に生まれながら、まだ仏法を知らない。はずかしいことだ。」としきりに反省しました。長十郎は「これはもったいない」と角と骨を持ち帰り、菩提寺である西徳寺へ寄

進しました。それ以来毎年旧暦6月28日には、お虫干しをして、その鬼の角を信者の人たちに公開しています。(現在は7月の第一日曜日)

4 旧郡役所跡

(昭和61年9月11日 三木町指定文化財)

明治32年(1899年)4月郡制の改正により三木・山田両郡が合併し新たに木田郡が生じ、同月池戸の西徳寺を仮庁舎として木田郡役所開庁式が行われました。現在、池戸公民館として使用されているこの建物は、木田郡設立20周年記念事業として現在地に郡役所として新築されることになり、屋根にはドーム(注1)をもつなど洋風建築で、県下でも貴重な建物です。大正7年(1918年)6月郡内19箇町村の青年団延べ3,500人の奉仕により、郡役所敷地盛土工事が行なわれました。大正8年(1919年)工事費13,775円をも



旧木田郡役所 (現池戸公民館)

って新庁舎が落成し、同9年（1920年）4月隣接して建築された公会堂、図書館とともに新築落成式が行なわれました。大正12年（1923年）の郡制廃止後も建物は残され、昭和5年（1930年）県蚕業試験場、昭和32年（1956年）県農業試験場三木分場などを経て、昭和58年（1983年）に池戸公民館として開館しました。

池戸は木田郡の中心として、今では想像もつかないほど賑やかな町でした。郡役所に用事のある人は、一般の人々は言うまでもなく役人も軍人も池戸に集まって来ました。バスが高松は勿論、仏生山からも川島・十川を通って平木まで来ていました。夜ともなれば赤い灯、青い灯がともり、カフェーにもぎわいました。若い男性にとっては、郡役所は兵隊検査の場所でもありました。

ところが、昭和の訪れとともに郡の中心としての池戸の繁栄は下降線をたどることになります。昭和元年（1926年）、郡役所は廃止となり、その役目を終えました。

（注1）《ドーム(Doimer)》 屋根に設ける窓のことで、屋根裏や吹抜けへの明り採り・外気導入を目的としています。ほとんどの場合、小さな切妻屋根を張り出し、窓は垂直に設置して、雨水の侵入が無いように考慮されています。

5 木田郡歌

作詞

三土忠造 (注2) みつち

作曲

楠美恩三郎 (注3)

一 いつの代誰かさらしけん

いわほ

巖にくだけ玉と散り

しらぬの 白布なせる虹の滝 こたう

流れてやまぬ水のごと

ここにたゆまぬ努力あり

ほうり 十三方里 十九町村 ちよそん

二 昔の人のひらきけん

しかいけ

四箇池 三谷 久米の池

めぐみは今も言いつぎて

なりわい いよいよそしむ生業に

ここにたゆまぬ進歩あり

ほうり 十三方里 十九町村 ちよそん

三 扇の的をいとめけん

屋島の浦のその昔

うわやのかぶら一筋に

こめし心をかがみにて

ここに楽しき平和あり

ほうり 十三方里 十九町村 ちよそん

木田郡が成立する直前の頃、三木郡は大内寒川郡に、山田郡は香川郡に所属していました。成立当初、木田郡は旧三木郡内7村（注4）、旧山田郡内12村（注5）の計19箇村でした。

大正8年（1919年）4月1日、平井村（もとの平井村・井上村・鹿伏村・池戸村を合わせた村）は平井町になりました。19箇村だった木田郡は1町18箇村になりました。木田郡歌には19町村とあります。木田郡成立間もない明治32〜33年頃（1899年〜1900年）「19箇村」という歌詞で作られたのが「19町村」に修正されたようです。歌ってみると「19ちよそん」と短くいわなければ歌えないのは言い替えだからだと思われれます。木田郡歌の歌詞は昭和15年に編纂された「木田郡誌」に載っているもので多くの人に知られています。が、「19町村」と印刷されているので初めからこの通りだったような誤解を与えているようです。

（注2）《三土忠造》明治4年（1871年）東かがわ市水主で出生し、東京高等師範学校を主席で卒業後、高等師範学校教授を辞して立憲政友会の衆議院議員となりました。内閣書記官長を振り出しに文部大臣・大蔵大臣・逓信大臣・鉄道大臣・枢密顧問官・内務大臣（一時運輸大臣も兼務）を歴任した戦前政界の重鎮です。

(注3) 《楠美恩三郎》慶応4年(1868年)青森県弘前市で出生し、東京音楽学校師範部を卒業後、東京音楽学校校助教授、同教授として活躍しました。日本の音楽教育に貢献し、数多くの校歌の作詞・作曲を手がけたことでも有名です。

(注4) 《7村》奥鹿村・井戸村・下高岡村・氷上村・田中村・平井村(のち平井町)・牟礼村の7村

(注5) 《12村》潟元村(のち屋島町)・古高松村・木太村・林村・三谷村・川添村・前田村・坂ノ上村(のち川島村)・十河村・東植田村・西植田村・庵治村の12村

6 蚕業試験場

安政6年(1859年)横浜港が開港され、生糸輸出の道がひらかれました。生糸は輸出貿易の根幹として重要視され、拡大生産されるようになりました。香川県も明治5年(1872年)養種製造業者に鑑札を下付し、明治20年(1887年)頃からは積極奨励策がとられました。三木町の養蚕もその頃始まったものと思われます。当時は先進地から技術者を招いて指導を受けていました。明治35年(1902年)、木田・綾歌の両郡では

養蚕奨励のため郡の伝習所が設置されました。当初遅々として進まなかった養蚕ですが、特産品である砂糖や綿が輸入品に圧迫され、米作も早害をうけたため、養蚕業の振興に努めることとなり、桑樹栽培の促進、養蚕伝習所、稚蚕共同飼育所の設置などが企画されました。養蚕が隆盛になるにつれて、蚕種製造業、製糸業、桑苗生産業、繭仲買問屋などの事業が興り、三木町は東讃における養蚕の中心地になりました。養蚕教育については、明治36年（1903年）池戸に木田農学校を開校し、大正元年（1912年）には養蚕別科を設けて生徒の育成を行っています。昭和3年（1928年）には池戸に県下最大の設備を持つ組合製糸が設立され、輸出糸の製造販売を行ないました。昭和5年（1930年）養蚕の試験研究機関「蚕業試験場」が高松から池戸に移転設置されました。養蚕業は順調に発展しましたが、昭和4年（1929年）の世界恐慌により繭価は暴落し、人造絹糸（レーヨン）の発達などによって次第に衰退していきました。



蚕業試験場の繭倉庫だった建物

7 池戸城（中城）

なかじろ

「池戸城跡 いけのへしろあて 初め安富氏此処に居たり。後山地九郎左衛門ここに遷る。山地氏、祖は三野・多度・豊田三郡の旗頭にて、三野郡詫間の城に居し人なり。」『讚岐国名勝図会』にこのような記載があります。城主は初め東讃の雄、安富氏が支配していましたが、のちに三野郡詫間城主であった山地九郎左衛門がここに来て城主となったとされています。城跡は香川大学農学部より200m北北西の方向にある、ブロックで囲まれた宗戸神社一帯がそうであると言われていきます。周辺の水路には当時の外堀らしき跡がうかがえ、かなり広い面積を持つ城であったと考えられます。

城跡の東と北にはかつて幅4mの広い堀が巡っていました。西を南北に走る道は古川の跡で、南西の鮎堀はここから水を引き込んでいた可能性があります。この堀跡もかつては4〜5mほどあったといわれています。『讚岐国名勝図会』では、ほぼ現在地に描かれています。中城・馬場・殿蔵・裏門・鮎堀などの地名に、かつて城があったことが偲べれます。



池戸城跡

【安富氏】

下総（千葉県）の出身で、紀氏を称していました。足利氏に従い戦功により播州三日月郷を賜りました。その後細川頼之に招かれて讃岐へ来ました。三木郡を支配していた三木氏に後継者が無く、その跡を受け継ぎ三木郡の領主になりました。室町幕府管領かんれいである細川氏の四天王として信任が厚く、応仁の乱では大いに活躍しました。三木町内で三木氏に代わって支配した城は高岡城（三木高校の北側）、属城として池戸城を築きました。また、細川氏の社家奉行しゃけふぎよう（注6）を務めたと伝えられています。

【山地氏】山地九郎左衛門

安富氏が池戸城を属城としていましたが、山地九郎左衛門が詫間から池戸に来て、城主となったとされています。天正11年（1583年）4月21日の仙石秀久を相手とする入野屋合戦にゅうのやにおいて活躍したとき、雨霧城主香川信景から感状をもらったとの記録があります。天正13年（1585年）秀吉軍との戦いの中で落命したとも、長宗我部元親に従い、土佐へ移ったともいわれています。

（注6）《社家奉行》 室町幕府の職名 神官の人事や神社に関する訴訟などをつかさど

【参考文献】

『三木町史』

昭和63年3月30日発行 三木町史編さん委員会

『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』 2003年 香川県教育委員会

『讃岐国名勝図会』 昭和51年11月20日発行 ㈱歴史図書社



池戸城跡 堀・古井戸の跡